
囁く蟲

如月詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囁く蟲

【Nコード】

N1061X

【作者名】

如月詩織

【あらすじ】

図書室で知り合った同級生
なんだかほっとけなくて

「デンパムシガコロシニクルンダ」そう言った綾人をぼくは忘れない。

そう言つて怯えていた綾人を。いつも怯えていた彼を。

綾人の何処か心もとないような瞳も。いつも何か言いかけて嚙んでしまつ口元も。

忙しくもてあそぶ指先も。弱々しいような歩み方をしていた足元も。

ぼくは一生、忘れない。

ぼくは彼を救えなかった。ぼくは彼を助ける事が出来なかった。おそらくぼくが一番近くにいたのに。

なのにぼくは何も出来なかった。

だからぼくは忘れない。きっと一生忘れない。

自分の中で彼を風化させない事で救われようとは思っていない。

ただ、今は傍にいない綾人を忘れない事で綾人がいない事実を紛らわせたい。

それはぼくのエゴだ。

それでも彼を忘れない。ぼくは綾人を記憶の中だけでもいてほしいから、だから綾人を忘れたくない。

ただ、それだけのことだ。

運悪くその日ぼくは風邪で学校を休んでいた。ぼくが休んでいる間に悪友が勝手にぼくを図書委員に推薦した。

次の日学校に行つてその事実を知らせた時は思わず悪態をついていた。

ぼくの通つていた学校では図書委員は放課後から五時まで図書室にいないではなかった。そんなに真面目な学校ではなかったのだけど、帰宅部を減らそう、みたいな教師の思惑なんだろう。

ぼくは運悪く帰宅部だった。別になんの部活に入っても良かったの

だが特に興味のある部活がなかった。

無理に何かに入ろうと種目を選ぶのがただだんに面倒だった。

おかげで格好の餌食になってしまったワケだ。

まあ、ぼくの通っていた学校はかなり辺鄙な所にあっだし、一人で通学するのも帰るのも少し億劫な距離だった。

通学は悪友たちとしていたが帰りは大体一人か、意味なく友人の部活動が終わるのをボンヤリ見ていた事も多かった。

いい加減な生徒の多い学校だし図書室にもそうそう人はこまい、黄昏時の誰もいない図書室でボンヤリするのもいいかもしれない。

基本的にプラス思考な性格なぼくの事、怒りも早々消えうせ（まあいいか）と思った。

そしてぼくはその日の放課後、図書室にいた。

これでもまあまあ読書は昔好きだったから、適当に本を選んでペラペラめくっていた。

簡単なミステリー本、あまり頭の良くないぼくでも犯人がすぐ分かり思わず苦笑い。

その時、扉の開く音がした。反射的に目をやる。

本を抱えた一人の少年。（下級生かな？）とぼくは思った。少年は身長も高くなくまだ幼い子供のような顔立ちだったし第一、見かけた事がなかった。

少年は無言でカウンターにいるぼくに本を返却する為にポンツと置いた。

返却カードを何気なく見るとぼくと同じ学年だった。クラスはだいぶ離れていたけど。

カードには少年の名前であろう（由良 綾人）という名が羅列していた。

「この本借りんの、7回目だね。お気に入りの本？」ぼくは結構知らない人にも話しかける節がある。

「えっ・・・あ・・・はい・・・」由良 綾人という少年は明らかに戸惑ったような反応だった。

「おれ今年始めて図書委員になつたんだ。えゝと由良君？君はここによく来てるの？」

「えつと・・・はい・・・わりと・・・よく来ます」

「ここホント人こなくて落ち着くなあゝいつもこんな感じなの？」

「・・・はい・・・」少年からは明らかに人と話すのが苦手、という印象を受けた。

ぼくはわりとどんな人間とも仲良くなれるという特技を持っている。

「おれ、山崎 信二っていうから、またここに来た時はよろしくな由良君。おれも一人で暇だしたまには話し相手になつてやってくれ」ぼくはそう言つて笑つた。

「・・・綾人でいいです」

「そうか。じゃおれの事も好きに呼んでくれ。」ぼくはついつい嬉しくなる。

「・・・えつと・・・信二君でいいですか」

「あのね、おれも2年生なの。ため語でいいし。」綾人はまた小さく微笑んだ。

その日から放課後から5時までいつも綾人と話すようになった。

いつもどこか戸惑つたような綾人だったがいつのまにかぼくに慣れてくれたのか、やっぱり遠慮がちな綾人だったがいつのまにかぼくに慣れてくれたのか、やっぱり遠慮がちな話し方だったがぼく達は短い時間の中に

本当にたくさん話をしたものだつた。

綾人はいろんなぼくの知らない話を教えてくれた。ぼくにでも読めるような簡単で面白い本を教えてくれた。

でもぼく達が友達になつたきつかけの本。それはぼくには読めなかった。

「ドグラ・マグラ」というその本は文面も難解ならば内容も入り組んでいて少し読んでみようとはしたが5ページ読んだだけでもうすでについていけなくなった。

「だめだ。おれには読めん！綾人よくこんなの読めるなあ。いや、

おれの頭が悪いのかな」

「この本は・・・結構好きなんだ。うん、というか読書が趣味だから教室でもいつも一人で読んでる。」そういつて小さく笑う。

その時、下校のチャイムが鳴った。

「うん、やっとチャイム鳴ったな。綾人も帰るのか？」

「うん、すぐ帰るよ」

「そっかじゃあまた明日な」

「うん、バイバイ信二君」

校門では友人達がたむろしていた。

ふと、その時綾人と同じクラスの友人がいたのを思い出した。

「由良 綾人って知ってるか？」

「由良？・・・ああ、いるな。喋った事ないけど。いつも一人で本読んでるなあ。・・・そういえばあいつが誰かといること見たことないな」

（教室でもいつも一人で読んでる）綾人の言葉がその時、浮かんだ。（うん、すぐ帰るよ）あの時の綾人はそういえばいつものように哀しそうな顔。何かを言いかけて噤んでしまう諦めたような表情。

一人。もしかしてあいつは今も一人でいるんじゃないだろうか？

誰もいない校舎でばくが帰った後もいつもいつも一人でいるんじゃないだろうか。

いつも一人で。

ばくは反射的に踵を返した悪友が背中から何か言っているのが聞こえた。

「ちょっと忘れもんしたから、先帰っててくれ！」そう叫んだ時にはもう図書室の明かりは点いていた。扉を開く。

ぼつんと一人で図書室の真ん中にいる綾人。

ばくを見つけた綾人の迷子になった子供のような淋しそうな瞳。

ばくはまだ息が乱れていたがそんな綾人を見て胸が苦しくなった。

「たまにはゆっくり話そうか。」そう言っ綾人の向かいに腰掛け

た。

少し戸惑いばくを見ていた綾人が初めて嬉しそうに笑った。

綾人の手には「ドグラ・マグラ」があった。

外は黄昏。窓ガラスからの黄昏。それは哀しい黄昏。

校門がそこから見えていた。もう帰る生徒の姿も見えない。

「ドグラ・マグラ」精神世界のドロドロした虚無感の話。

綾人はそれをいつもこんなところで一人で・・・？

「いつも見てたよ。」綾人は口を開いた。

「いつも羨ましいな、ってここから見てたんだ。いつも笑っている。いつも教えてくれるんだ。みんながお前に死んでほしいと言ってるって

みんながお前を嫌って笑っているぞって・・・だから本を読み続け
てないと・・・あいつらが・・・あいつらが頭の中に入ってくる。

あいつらは電線の中を光の速さで移動する・・・もう、どこにも逃
げられないんだ・・・」

綾人の目は狂人のそれだった。もうすでに手遅れだった・・・。

「妄想だ・・・。」ぼくはどうしていいか分からなかった。

「全部お前の妄想だ！そんなモノはいない！全部全部お前の妄想な
んだ！」

半分は自分自身への言葉だったと思う。

ぼくは綾人の抱えていた恐怖や苦しみそれらを全て否定していまっ
たのだ。

その時のぼくにはそうするしかできなかった。

急に綾人の表情から全てが消えた。喜怒哀楽何もない。本当にただ
の表情。なにもない顔。フラリ、と椅子から立ち上がった綾人はぼ
くを通りすぎて図書室を出ようとした。

ぼくはとめようと綾人のほうに向き直った。

綾人の歩み方は蝶々を追う赤ん坊のようだった。

危なっかしく歩くその歩みは蝶々も何も本当は見えてない。

ぼくは声をかける事が出来なかった・・・。

次の日もその次の日も綾人は図書室に来なかった。

心配になって綾人のいる教室をのぞいたけれど綾人はいない。たまに居合わせた教師に聞くと、ここ2日休んでいるという。

嫌な予感がした。教師に綾人の住所を聞いて急いでそこに向かった。今、思い返すと亀の歩みより遅く。

綾人の住んでいるというアパートは今時こんな物件があるのか、というくらいの古いアパートだった。

インターフォンも壊れていた。ノックしてもなんいた。ノックしてもなんの音も返ってこない。

ぼくは躊躇いなくノブを回した。鍵はかかっていたいなかった。狭い狭い暗いワンルームの部屋でそうしてぼくは

首を吊っている綾人を見つけたのだった。叫んだ。獣のように。叫びながらぼくは急いで綾人の体を忌々しいロープから下ろした。

綾人の顔は青白かったが生きていた。生きていた。

心臓は弱弱しくも鼓動していた。発見が早かった為、綾人は大事には至らずすぐに退院をした。保護者にはぼくから連絡をした。

綾人の母は海外におり、事情を説明しても「仕事が忙しくて戻れそうにない。」と海の方こうからそう言った。

電話は家政婦が取り接いでくれた。

すくなくとも海の方こうで優雅な暮らしをしている綾人の母をぼくは想像できた。

ぼくは毎日綾人の部屋にいた。綾人はもう首を吊ろうとはしなかった。

しようとしなかった。

綾人の心は何処かにいってしまっていた。

何をして話かけてもなんの反応もない。首吊りの後遺症ではなか

った。

本当にただ、綾人の心はどこか遠いところへいつてしまったのだ。

「綾人。」返事はなくともぼくは話しかける。

「どうして返事をしてくれないんだ？」もう表情が変わる事もないもう小さく笑う事も遠慮がちにも話すことはない。ただボンヤリと前を見ている。多分、何も見てはいない。

「なあ、綾人。」それでもぼくは話しかける。

「妄想だよ。綾人。電波虫なんていないんだ……。」「綾人、だから……。」

「ごめんな。お前は怖か恐怖感がお前に妄想として現れてたんだよな。」「お願いだから……。」

「ごめんな。お前の目はいつも助けてつていつてたのに……。おれはなんにも出来なかったな……。」「こっちに戻ってきてくれよ。」

綾人。「なあ、綾人おれがいたらあいつらもよつて来ないんだろ？お願いだ。もう一度チャンスをくれよ。あの時、おれはお前に声をかけなかった。お願いだやり直させてくれと心から思った。次は綾人が一人でどこかに行こうとしたら絶対に引き止める。」

だから、もう一度だけ……。

だけど綾人の目は何も見ない。ぼくの事も見ない。

ぼくはいつの間にか涙を流していた。悔しさと自虐心でいっぱいだった。

こんな状態で綾人の傍にいてはいけない。

「また来るよ。」ぼくは部屋を後にした。

その後ぼくはそこにいなかったのだからは憶測だ。

ぼくの涙ながらの叫びは綾人の心に、ほんの少し残っていたカケラに……。

多分、届いたのだった。

「妄想だよ。」「ごめんな。綾人。」ゆっくりと多分、届いたのだ。

「妄想だよ。電波虫なんていないんだ。」「ぼくの言葉が少しづつ……。」

「・・・妄想・・・だよな・・・」綾人の心がゆつくりと・・・。
「妄想だよな・・・妄想だよな・・・」ねえ信二君。妄想だよな。
「いないよね・・・電波虫なんていないよね・・・そんなのは妄想だよな・・・」そう信じこめば、もしそう思えたら。

もしそうなら君とまた友達にもどれますか？

・・・ブーン・・・ブーンと虫の羽の音。

そして現れた”電波虫”弱りきった今にも消え入りそうなその心に叩きつけられる言葉言葉言葉・・・。「死ねよ。お前なんか。」

「生きてる価値ねえよ。」

「みんなそう思ってる。みんながそう願ってる。」

「おい、だからもう・・・死んじゃえよ。」

唸る虫たち。囁く虫たち。

ねえ、信二君。妄想ですよ。妄想ですよ。

「綾人お前にはこれが現実なんだぜ。」

嘘だ嘘だ嘘だ！

「お前たちなんか妄想だ！お前たちなんか存在しない！」綾人は虫たちを切りつけた。

刻んで刻んで・・・。

電波虫、の妄想の正体は綾人のコンプレックスだった。

「こう思われていたらどうしよう。」そんな心が電波虫を作り上げた。

電波虫は綾人自身だった。

綾人は虫を切り刻んだ。虫は綾人自身だった。

綾人は自分を切り刻んだ。

ぼくは思いのほか気が乱れていたらしく、カバンを綾人の部屋に忘れていた。

ぼくが戻った時、綾人は血まみれで立ち尽くしていた。

「信二君。」ぼくが叫ぶより先に綾人が口を開いた。

「電波虫は本当にいたみたいだ・・・」崩れ落ちた綾人。

・・・やぱり友達にはモドレマセンネ・・・。

血まみれで息絶えた綾人をぼくは呆然と見ていた。通りかかった人が警察に連絡した。

ぼくは扉もしめる事も忘れて立ち尽くしていたのだ。

ぼくは初め殺人犯扱いで連行された。

そして確かに見た。黒い虫たちがぼくを見て笑っていたのを。

すぐにぼくはただの第一発見者となった。

警察はそんなに馬鹿ではない。現場をみても一目両全だし、綾人が首を吊った事実、カッターについていた綾人だけの指紋もそれを裏付けた。

しかし、ぼくにはそんな事はどうでもいい事だった。

ぼくは綾人を救えなかった。助けてやれなかった。

あんなに綾人の目は救い

を求めていたのに。

ぼくはなにも出来なかった。

そんなぼくに今日も電波虫は笑う。

「お前があいつを殺したんだ。」

「生きてても意味はないぜ。」

「おい、もう死んじゃえよ。」

電波虫は笑う。低い声で。

何処に行っても逃げられないんだ。

電線の中を光の速さで移動するから。

ぼくは今日も電波虫に怯えている。

綾人は友達に戻れないと言った。しかしそれは違う。

ぼくももうすぐ綾人の傍にいけるのだろう。

綾人だから大丈夫だ。ぼく達はまた語り合えるだろう。またやり直せるだろう。

・・・ブーン・・・ブーン・・・低い羽虫の音が今日も聞こえる。

ああ、誰かモウソウダツイツテクレ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1061x/>

囁く蟲

2011年10月9日15時36分発行